

第8回松阪市環境懇話会

- ・開催日時 平成15年1月24日(金) 午後2時～午後5時30分
- ・開催場所 市役所 5階 特別会議室
- ・出席者 環境懇話会 座長：寺本博美
委員：高橋保幸・富田靖男・大西憲一・筒井弘佳・橋本英一・
岩出 隆・花山初子・佐藤智基・押田優子・今井久晴
エステム 丸山・松田・水口・早川
事務局 環境課 池田課長、吉川課長補佐、若山、吉田



・協議内容

座長「今日の予定だが、まず環境に関するアンケート調査…前回は市民・事業者の結果の概要についてお話しをしたが…今日はそれに加えて小学生・中学生アンケート調査結果について、2番目には前回少し宿題が出たので、市民・事業者アンケート調査のクロス集計に関してその結果の説明とそれに対する意見交換をしたいと思う。それともう一つ重要な案件である提言書の案について、いろいろとご審議していただくことになる。少し長丁場になると思うがよろしく。まず、環境に関する小学生・中学生アンケート調査結果について。」

エステム松田「今回は時間が少ないこともあり、小学生・中学生の結果を同時に紹介していきたいと思う。(説明省略)」

小学生アンケート調査結果(問1-問10)

中学生アンケート調査結果(問1-問12)

小・中・市民クロス集計

(関心のある地球環境問題について)

(周辺の環境について)

(未来に残すべき特色のある松阪市の環境に関わる資源)

(環境をよくするための取り組みの主体)

(環境をよくするための行動)

(どうしたら環境はよくなると思うか)

座長「子供たちがどのように環境問題について考えているのか。なかなか子供たちに日常生活の中で環境問題を意識させていくのは容易ではないと思うのだが、なにか気になることは。先ほど公共交通機関に関して中学生はほとんど不便さを感じていないという点において、彼らの生活行動は基本的には自転車であるということなので、あまり意識していないのかもしれない。」

今井委員「このアンケートは郵送で行ったのか。」

事務局「直接、学校で実施した。」

今井委員「意見がすごく多いと感じた。今の子供は、自分たちの頃と比べて環境に関することをずいぶん教えられていると感じる。」

花山委員「私も小学校と中学校を比べてみて、一番感じたのは（小学生は）川とか身近なところのものに感心があるが、中学生は自転車に乗る機会が多いことから、身近なこと以外に感心があるのかなと感じた。これからの行動（今後どのようなことをしたら環境はよくなると思いますか。）に関するところなどは、今井委員が言われたように学習の結果からそのようなデータが出ているのかなと感じる。例えば、『海や川をきれいにする』というところで…小学生はすべて選んでもよいとなっているのでまるをつけるかもしれないが。…身近に海や川も見ているし、東黒部小学校のように総合的な学習で取り上げていることも、（環境が）大事だということにつながっているのだと思う。また、ゴミの問題は4年生の教材にあるから関心も高いし、5年生になると公害に関する学習とか森林も教材で出ている。教育委員会からエコフィス（エコフィスアクションプログラムまつさか）でも学校はどう取り組んでいますかと児童会を通じて働きかけをしている。やはり子供たちは学習を積み重ねれば（環境に関する）意識も高くなっていくと感じる。ただ、中身的に『どこで遊ぶのが一番好きですか。』と

いう設問では、あまり自然と触れ合っていない現実もあって、虫などを見かけるというところにはたくさんまるがあるのだが、接しているという部分では子供たちの現状を表しているのではないかと思う。一箇所設問の中で感じたのは、小学生の間5の『周りの様子について教えてください。』の7目番の『山や土手、原っぱなどの遊ぶところがありますか。』という設問に対して、山がはじめてきているので山エリアは『はい』が59.7%に対して、海エリアは（『はい』が26.3%）『いいえ』が61.3%になっている。東黒部とか統計をとったところをみると、はじめて山があったので（海エリアの）子供は『山はない。』と思って回答したのではないか。先に『土手や原っぱ…』と質問内容がなっていたら、子供たちは『はい』を多く選択したと思う。」

座長「遊ぶ場所がだいぶ影響しているといえるのではないか。やはり海とか山、川などの自然の中で遊ばせることを勧めるような家庭環境にあるのかどうか。というのは、いろいろな意味で危険が伴うものであるということ。そうすると目の届くところで遊ばせたいという大人たちの影響を受けているのかな。（このアンケート調査の結果は）素直にとれる部分とどこか大人に誘導されている部分があるのかなとも思う。ゴミの問題は確かに学校周辺の問題として、教科の中に入っていてそれを基にして、いろいろと発表会をしている小学校もある。やはりゴミの問題は関心があるのかもしれない。」

筒井委員「小学生・中学生の意見の欄に興味を持ってみたのだが、なかなかしっかりしたことを書いているように思う。（対象は）中学生は2年生と小学校は4年生ということで、年齢差からみて内容にもひらきがあると思っていたのだがそうでもなかった。中学生のレベルが低いというよりは、小学生のレベルが高いといえるのではないか。環境教育がだんだんと浸透してきて（子供たちが環境に対する）興味や知識が増えているのではないか。小さいうちから環境教育が必要なのだと改めて感じた。それに対して大人の勉強というのは、学校のようにいつも集まっているわけではないので、環境教育を浸透させるのは難しいと感じた。」

今井委員「（小学生・中学生の）いろいろな意見の中で、大人や社会に対する批判が多くある。それに対して大人がどうやって子供に環境教育をしていくのか。非常に難しいと思う。」

座長「大なり小なり子供たちは大人の姿をみていることは確かである。こういう子供たちが増えてくれば、大人もゴミのポイ捨てや環境に悪いことができなくなる。そういうまちになれば…」

座長「将来の松阪市の環境を担っていく子供たちだから、現代の我々と子供たち、短期的な問題と長期的な問題と分けて考えれば、環境教育の大切を感じとれると思う。それともう一つ、中学生アンケートの『未来に残したい松阪市のよいところ』では、松阪の5大祭りがどのエリアをとっても高い結果となった。このことと、自然を大切にしていくことをどう結びつけていくかは難しいところであるが、中学生にとってみれば、将来というよりは今現在、遊べるのはなんだろうかと考えると『祭り』というのは楽しいものであるから、これだけは残したいと考えているのかもしれない。5年生以上になると『祭り』（祇園祭り）も友達だけで自由にいける環境にあるということからも。」

岩出委員「（中学校のアンケート調査結果）概ね予想どおり。遊ぶ場所などは、中学生は家の中が43.8%と半分近くが家の中で遊ぶと答えている。これは、『遊ぶ』というよりは『時間を過す』という考え方だと思う。中学生になるとクラブ活動などでなかなか遊ぶ時間がない、それで家の中でどういうふうに時間を過すかということになり、それがこの結果につながっていると思う。あと気になったのが、スーパーなどの大型店で時間を過すことに快楽を求めている子供たちがいることである。また、地域差によるデータは、極端には差はでなかったように思う。やはり、身近なところの環境問題を扱っているので、ゴミの問題、水の問題は関心が高かった。また、祭りにおいては、（市民アンケートと比べると）意外なように思うが、子供たちからみたら予想どおりの結果であると思う。夜店とかを楽しみにしているし、中には『祭りだと3時間で帰れる。』と授業が短縮になることが楽しみにしている生徒もいる。これからの取り組みでは、市民アンケートでは、市民・事業者・行政が一体となって取り組んでいくという数字が圧倒的に多かったのだが、中学生の回答では、市民が中心となっておこなっていくという回答がかなり多い。これは、私たちがやってくという中学生の純粋な気持ちが表れているのではないか。」

富田委員「『今後どのような環境になると良いと思いますか。』とう設問に注目してみた。特に省エネ問題と公害問題をとってみると、中学生では他の項目と比べあまり高くないが、小学生は他の項目に比べ比較的高い数値となっている。（選択形式が、中学生は3つ選択、小学生は気になることすべて選択と異なっているが。）これはとり方による違いによるものなのか。」

押田委員「『周りの様子について教えてください』の設問で、問1~4までの質問事項に対してエリア別の結果が非常に興味深い。（同じエリアでも）住んでいる環境の違いによってデータは異なってくるのだと思う。」

橋本委員「山に木を植えるということに対して、案外子供たちがたくさんまるをして
いる。このことにおいては、学校ではどういうポイントで山に木を植えることに関し
て教育をしているのか。」

花山委員「5年生の教材に森林についての学習があって、木が植わっていないと山崩
れをするなど社会科で学ぶ機会がある。そうするとすぐに子供たちは大切だと感じ
る。勉強したものについては素直に感じるのでは、自分で進んでまではっていない
と思う。」

橋本委員「また、いろいろな面で教育されるかと思うが、松阪市民に関しては、木が
植わっていない山を見かけることはないと思うので、その点においては環境教育の効
果ではないかと思う。その他に、針葉樹を広葉樹に変えてCO₂（二酸化炭素）を増や
すという将来の問題については。」

花山委員「そんなに深くないのでは。ただ、山の学校では身近な方々が普段から山に
接しているので、子供たちに心から行動として教えていただいていたと思うのだが、
おそらく山に関する知識については松阪市では教科書や本が中心になっていると思
う。川の場合は東黒部小学校のように実践的に学習していることもあり、子供たちも
身についているのではないかと思う。」

座長「佐藤委員は、森林教室でいろいろなボランティアをやった経験があると思う
が、その時は子供たちが対象なのか。具体的にはどのようなことをやっているの
か。」

佐藤委員「（教室は）子供対象である。普段町で生活する子供たちにとって、山の作
業をすることで身近に山を感じてもらおうようにしている。年に2回ぐらいは実施して
いる。」

橋本委員「市民アンケートの結果を小学生・中学生アンケート結果と比較してみ
ると、森林の保全に関する項目が低いように思う。海・川の方は増えているのだが。実
は、将来松阪市は、飯南・飯高と合併する可能性が高く、合併すると市域に占める森
林の割合は非常に高くなる。しかも、この森林の大部分は針葉樹である。林業家は、
針葉樹を広葉樹に変えていく努力をすでにはじめているのであるが、この辺もほっ
ておいても変わるはずもない。しかも、京都議定書で我々は今後CO₂を減らす点で、森
林に60%以上の負荷を与えている。これでCO₂を減らせとされているようだが、その
ままの森林でこれを達成することは難しいと思われる。この課題に対する対策を林業
家に求めるのは不可能なこと。だから、この項目に関心を持つ必要があると思うので

あるが、アンケート結果ではでてきていない。この点についてもっと関心を持つべきではないか。」

座長「林業そのものが厳しい状況にある。伐採した後は広葉樹に変えていく。伐採がすすまない限りは、広葉樹に変えるということは難しい。今環境懇話会では、この合併の問題を念頭におくことも大切であるが、とりあえずは今の市域の視点で考えていかざるを得ないと思う。この山の問題については、押田委員もいろいろご意見があると思うが。」

押田委員「ツツラト峠でも広葉樹や落葉樹を植える運動をしている。植林した木になってくると山崩れの原因にもなるし、（木を植えることで）動物にもやさしいということなので。市も公園を作るなどで木を伐採した後は、落葉樹など実のなる木を植えてもらいたい。」

座長「小学生・中学生アンケート調査結果から、山に対する意識の問題があがったが、今後の環境教育の中で、子供たちにそういう意識を持ってもらうように進めていくという方向で問題点として指摘しておけばよいのかな…山のことについては、提言書のところでもあるのでここでもご意見をいただきたい。」

大西委員「小学生・中学生と市民との差が大きいところには、森林以外にどこがあるのかなとみてみると、一つは野生生物の保護という点である。市民が9.8%に対し、中学生が36.4%、小学生が54.7%と非常に差が大きい。選択方法が多少異なるので絶対値は少し異なると思うのだが、その他に下水道の整備において市民が30.8%に対し中学生が7.2%という結果がでている。市においては下水道の整備そのものが具体的な形でてきているので身近な問題といえる。水に対する関心も含めて、大人たちは非常に高い関心を持っている。ただ子供たちがみた時に、川や水辺をきれいにする意識は高くても、それが具体的にどうしていけばいいのかという形としてはまだたどり着いていない。あともっと差が大きいなと思ったのは環境教育の点である。環境教育の充実に関しては、市民が13.9%に対して、中学生が2.9%という結果である。市民は環境教育の必要性をある程度感じているが、中学生からみると環境に関する行事や勉強会は、市民ほどは必要性を感じていないように思われる。確かに、私たちが小学生・中学生の時には、あまり環境に対する勉強会がなかったので、逆に環境に関する新しいことが出てくるので、環境教育をどんどんやっていかななくてはいけないという気持ちが市民にはあるのではないか。実際に、環境教育を実践している小学校・中学校では、いろいろ教育されて子供たちの意識の中に定着してきていると感じる。」

座長「実際に、いろいろな環境に関する作文やポスター案内など学校にはいろいろアタックしてくるが、会社にはなかなかできない。もう一つ気になったのは、公園・緑地の整備の項目である。小学生は市民や大人以上に公園を作り、街路樹を整備することに関心がある。この部分を花山先生はどのように理解されますか。」

花山委員「『今後どのような環境になると良いとおもいますか。』の設問でも、緑がたくさんあるまち、星がきれいに見えるまちを選ぶ子供が多かった結果からも、緑に対して公園も緑があつたりして小学校の場合は、全て選ぶことができるのでこれもこれもという感じて選んだのではないか。そこには、子供たちの純粋な気持ちが感じ取れるのではないか。」

座長「高橋先生何かまとめの感想でも。」

高橋委員「7 ページ『どのようにしたら環境はよくなると思うか。』のところで、大きく分けて3つのタイプに分けることができるのではないか。『中学生のほうが一般市民より高いタイプ』、『中学生と一般市民と似たタイプ』、『一般市民の方が高いタイプ』がある。1～3番までは『中学生のほうが一般市民より高いタイプ』、4～8番までは『中学生と一般市民と似たタイプ』、9番の下水道は『一般市民の方が高いタイプ』、10番のごみの問題は意味3番と同タイプと言える。整理すると、大人タイプの関心と子供タイプの関心があつて、大人の関心も大切だが子供の関心も大切である。」

富田委員「自由意見をみると、小学生・中学生ともにゴミの問題、あるいはタバコのポイ捨てのことが多くみられる。改めてゴミ問題に関心があるのだなと感じた。」

座長「小・中学生のアンケート調査結果はこのぐらいにして、次に市民・事業者アンケート調査のクロス集計について。」

エステム水口（説明省略）

市民アンケート調査結果 エリア分け

市民アンケート調査結果 回収率

市民アンケート調査結果 クロス集計 問3

座長「エリア分けをするということで、旧市街地と海岸部、山間部と平野部は重なり合っているということもあつて、このあたりを分けるのは難しいけれども、農地面積を含めて平野部ということにした。実際には住宅地が多くある地域もあるのであるが。山間部は、伊勢寺から大河内辺りと山間部というよりは、中山間部も含んでい

る。このように4つのエリアに分けて考えることにした。男女比は無回答の部分も多くあって、ここから結論を導き出すのは難しいと思う。さて、問題は問3であるが三重県のデータと比較して、市民は危機感を感じているようだ。エリア別では比較的市街地エリアが地球とか日本とかというマクロ的な視点での環境問題に関心が強いといえる。」

市民アンケート調査結果 クロス集計 問4（エリア別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問4（年代別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問4（他のデータとの比較）

座長「前回の結果に加え、エリア別、年齢別と他のアンケート結果（三重県、伊勢市、鈴鹿市）との比較となっている。」

富田委員「（歴史的な雰囲気を感じる項目での伊勢市との比較で、『はい』と回答した比率が伊勢市で98%、松阪市で35.2%である点について）これは当然の結果だと思う。また、『12. 夜道が暗くて歩きづらい』や『19. 高齢者や障害者にやさしいまちである』での年代別比較で、70歳以上の満足度が他の年代と比べて高いのは我慢強いからではないか。以前よりは多少よくなったから満足したという。」

高橋委員「この項目は、高齢者ほど高い満足度であると強調できないのでは。この項目は他の項目に比べて現状度も満足度も低い結果にある。高齢者は極端な反応を示さないことが多いから、皆がずっと下がった時にはあまり下がり方が少ない、ずっと上がった時には上がり方が少ないそのように答える構造が基本的にある。ただ、あまり高齢者が松阪市をよく思っているという表現が避けたほうがよい。」

座長「10番目の『身近に鳥や昆虫など生き物が多種棲息している』という項目で、年代の若い層の満足度が高いとしているが、出たデータとしてはそうだと思うのだが、年齢を高くなるに従って満足度は低くなっている。これは、はじめからこういうものだと思ってしまえば、どれだけいたかというのはわからないものであるし、今の状態がけっこういるじゃないかと思えば満足度が高くなるだろう。昔はここにはたくさんいたのに今はなくなったと感じれば満足度も低くなる。若い層は、『いない時代』からスタートしているからあまり比較にならない。昔のように生き物を住まわせるのは、人工的におこなわないと難しい。」

市民アンケート調査結果 クロス集計 問5（エリア別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問5（年代別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問5（中学生との比較）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問7（エリア別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問8（年代別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問8（男女別）

市民アンケート調査結果 クロス集計 問8（他のデータとの比較）

座長「問7『環境をよくするための行動について』の5番目の『自動車をなるべく使わずバス電車など公共交通機関を利用する』という項目で、海岸部と山間部が『今後とも行うつもりはない』というよりは『今後とも行えない』の方が妥当ではないか。非常に注目すべきことは、6番目の『停車時に車のエンジンをかけっぱなしにしない』に関してどのエリアでも約6割が『いつも行っている』と回答している。これは実感としてどう理解すべきなのか。」

押田委員「夏に、アイドリングをしている人は多いと思う。」

富田委員「この項目でも、高齢者層の取り組み状況はよい。これも我慢強いからなのか。」

富田委員「若い世代が心配だ。回答率を見ても20代・30代の回答率が他の年代に比べ極端に悪い。それだけ関心がないのか。この年代は一番大切なのに。」

筒井委員「今の小学生・中学生がこの年代になれば、もう少し変わるのでは。」

大西委員「問7『普段の生活の中で取り組んでいる行動について』のところで、三重県、伊勢市、鈴鹿市とのデータの比較をしている。まとめの欄には、データが少々古いこととなっているが、三重県、鈴鹿市、伊勢市はいつ調査されたものなのか。」

エステム水口「三重県は平成12年1月、伊勢市は平成11年3月」

事務局「鈴鹿市もほぼこの時期に実施されたもの（平成11年8月）である。最近実施された調査のデータを集めた。」

大西委員「比較的新しいデータを使ったとしてよいのか。」

事務局「そうです。」

座長「環境基本条例などを作る段階で調査したところはあるが、その後のフォローとして調査しているところはないと思う。」

座長「提言書案について、すでに送らせていただいているのでご一読していらっしゃると思う。まず、全体的な概略をお話していただいて、皆様のご意見を賜りたい。」

事務局 若山（説明省略）

提言案本文

座長「これまでの会で出た意見を取りまとめながら、一応たたき台という形になるけれども提言をまとめてみた。これが十分に反映されて、この懇話会の役割が果たされると思う。大いにもんでいただきたい。ポイントは大きく分けて2つだろうと思う。提言の基本項目と順序付け、もう一つは各提言の内容とその表現の問題。この2つの視点でご意見を頂ければ。」

今井委員「この提言書は、誰に見せるのか。」

事務局「この提言書は、市長に手渡すことになり、全ての施策にこの提言が反映されることになる。」

今井委員「ここいる人とは関係ないということになるのか。」

座長「そうではない。出す場所は市長しかない。それについてどういうことが行われたのかについて、市民の皆さまにも知っていただかなくてはいけない。そのために広報的な活動の中で公開講座あるいはミニシンポジウムという形で、おそらくこの中の皆さんにも加わっていただけて行くことになるだろう。これは公開をしないと行けない。この提言書は見ていただくこと、対外的なことを意識して提言書を作らなければいけない。もちろん、これに基づいて次年度以降からどうやって作っていかなくては行けないのかというルール作りをやっていかなくては行けない。このルール作りにも影響を及ぼすものであるから、そのところも十分に踏まえてご意見を頂きたい。」

今井委員「自分たちは、だいたい分かると思うが、初めて見た人はこれを理解できるかなという部分はある。」

座長「具体的に教えていただくと…」

今井委員「2ページの「水環境」という部分、これは具体的にどういう意味か。後、3ページの16行目の『市民が果たす役割が重要であることより』の部分は『重要であることにより』という表現のほうがよい。7ページの6行目の『原因者が同時にその影響を受ける者』とあるが『影響を受ける者』というのは『被害者』の方がよいのでは。それと、ゴミの問題…市民や小学生・中学生アンケート調査でも、ゴミのポイ捨

てや不法投棄の問題に関心が高かったこともあるし、顕著な問題にはなっていないが都市からの産業廃棄物の不法投棄の問題など将来起こる可能性の高いものに対しても取り上げるべきではないか。それに加え、高齢化社会に対応するバリアフリーの問題も。あと、10 ページ 25 行目の新エネルギーに関して、太陽光発電と風力発電とあるが、市域では風力発電は適さないのではないか。バイオマス発電の方がよいのでは。一般的に風力発電は環境にやさしいものとして定着しているが、松阪市では実現し難いのでは。この文章では、新エネルギーの説明として代表的なものをあげたと思うのだが。」

押田委員「11 ページの 4 行目で『行政、市民、事業者』とあるが、これにボランティア団体、松阪市だけでなく三重県全体でやってみえる団体の知識とか成果も踏まえて参加できる場所を作ってもらえたらと思う。この部分はボランティア団体を含め、年配の人が持ってみえる知恵…例えば棚田、石垣などもつくれば生き物もかえてくると思うし、いろいろな知識、知恵をもらって住みよい松阪を作ってもらえたらというのが私の願い。行政がルールを引くのではなくて、自分たちでできるものは自分たちでして、それに手助けをしてくれるのは事業者であり、一般市民も参加できる地域づくりをしてもらいたい。これが本当のまちづくりになっていくのだと思う。」

座長「この委員会は、市民が主役。我々が主役である。松阪市というのは場所とやるための知恵を借りているということ。これは市民が作ったものであるということがあれば、そこだけを強調することもないと思う。それは行政にお願いすることではなくて、ここで我々が作るんだという意識を持たなくては。」

筒井委員「水環境の話で、人工林の手入れ不足が水環境の悪化に影響を及ぼしているのは確かだが、人工林の手入れ不足というのは林業の実態から考えると避けられない状況である。水環境というのは、針葉樹の人工林ではなくて広葉樹を増やさないと解決しない。今の間伐は切って山に捨ててくるだけ、広葉樹の（間伐材の）場合は炭を焼いたり椎茸菌をうったり利用価値がある。それに対して、針葉樹の人工林は自分の生涯に渡って自分の植えた木は自分で切れない。次の次孫の代まで切れないそこまで手入れして、今の安い木材市況でやっていけない。今の木を切ったおかげで、次の孫の木を育てることができず、サイクルが切られてしまっている。だから、これから人工林を切って植林する時には、広葉樹にシフトしてもらいたい。人工林…杉とか檜は切ったら終わり植えなければ生きてこない、しかし、広葉樹は切っても根は死なずまた生えてくるしサイクルも早い。動物も広葉樹には集まってくる。そうすべきであるということを加えるべきである。また、里山に親しむのは広葉樹でないと親しみ難い。里山に親しんでいくようにしていかななくてはいけない。」

富田委員「森林の適正な管理と保全が早急に求められるとあるが、もう少し具体的な表現を加えるべき。」

押田委員「8ページの松阪らしさのところ、蒲生氏郷や本居宣長のことがあげられているが、射和にも富山・家城や「射和文庫」などがあるので、このことも加えてみては。」

橋本委員「この位置付けは、松阪商人のルーツということにしてはどうか。」

花山委員「環境教育のところ、6ページの下から4行目の『幼稚園や小学校・中学校から…』のところは『園児や小学生・中学生から…』に変えてみては。」

座長「幼稚園は文部科学省、保育所は厚生労働省が管轄していることもあると思うのだが、もっと広い意味で、小さい子供たちぐらいの表現でもよいのではないか。」

大西委員「2ページのところで、『次に、農村地域では、開発による農地の減少や過剰施肥や農薬の使用による土壌汚染や水質汚濁…』という一文があるが、西田委員がお見えになれば意見をお聞きしたかったのだが、この部分にこのような表現を入れるべきなのか。」

座長「前回、環境ホルモンの話を聞いたし、レイチェル・カーソンの本を読むと一番問題なのはこの部分である。ここでは早く気がつけとっているんだけど、そこまで言えるかどうか。表現の仕方…環境ホルモンの問題が出てこない。あまり事象を特定化してしまうと言葉として強い表現になるかなと思う。実際に使わざるを得ない部分もあるだろう。もう少し表現を前向きに変えていけば。」

筒井委員「この問題は、三重県でも問題になっている。お茶の刈り場の溜池などは、窒素が非常に多いと問題になっていて、農業も肥料設計を改めて少なくするという方向で農家も動いている。表現の問題はあるだろうけどこのように動いている。お茶だけでなく他の作物もそうであり、これも重要な要素であると思う。」

富田委員「同じ提言の箇所だが、都市地域における生活排水による水質汚濁があがっている。これは下水道が完備されれば徐々に解消されていく問題だと思うのだが、生活排水による水質汚濁は都市地域よりも農村地域の方が問題ではないのか。全体の流れはよいと思うのであるが、文言だけ…」

富田委員「それと、10ページの風力発電に関してだが、私自身としては抵抗を感じる。青山高原に20基ほどの風車が立っており、自然の力を使ってやっているのによいと思うし、久居市はこれを環境のメインとしてやっているが、実際に行ってみるとフ

ァンの回る騒音や野生動物特に鳥にとって障害になる。エネルギーとしてはよいと思うが…ここに入るのほどうか、別のものがあれば…」

座長「(5) 番目に入ってくる問題が、実は松阪市の環境をどういう方向にもっていくかという基本的なことに関わる問題である。方針をどこに持っていくのか。」

高橋委員「提言 6 項目方式…まずこれでいいのかという問題はある。主要な項目を 6 つにすることは僕はよいと思う。そうすると 6 つしかないので、問題はその選び方。最初は水の問題からきてる、他のいろいろな要素があるが最初に水の問題を持ってきていいのか。水をテーマにしながら、松阪らしさを表現しながら結局は大切な話になっているんだと、『山』とか『農地』『自然の生物』『私たちの生活だとか』だとか。それを『水循環』という言葉を使っているのよよいと思うのだが。2 番目は、『自然と共存する都市（まち）の実現』ということで、『都市部』と『郊外地域』に分けており 1 番目の提言とは分け方が異なるこれも問題ではないか。例えば『自然と共存する都市（まち）』という言葉があつて、これは今はだいたい認められていると思うのだが、都市は本来自然に対立するものであるが最近では自然と共存する都市（まち）というのが世間の一般的な言い方になっている。この松阪のまちは、世間的な流れと同じように自然と共生していくのかどうか。3 番目の環境教育に関しては、少し環境教育の中身をはっきり言っといたほうがいいのかかなと思う。少し 20 年・30 年先の話を言い出したがために少し混乱しているかなと…。生涯教育も少しでてくるが、ここでは大変子供の環境教育を話題にしているが、大人も大切である。子供は 20 年・30 年たたないと効果が出てこないわけであり、もっと早く効果を出すには大人をとにかくなんとかしないと。先のデータにもあるように子供は少しずつ教育が行き届いている。悪いのは大人なのでは。4 番目は環境施策までにどうやって位置付けるかということである。歴史的建造物、都市景観、自然景観という言葉が入っているが…『環境』の定義の問題、環境の定義にこの歴史分野は入るのかということをしっかりしないと、この提言が浮き上がってしまう。5 番目は一つ欠けているのは主体に関する議論がまとめて入っていないのかなということ。この 5 番目ではっきり言うのか、6 番目で言うのか。内容はぱらついている。大きな枠組みについて議論する必要があると思う。」

座長「表現もさることながら、まず中身…共生するという言葉、これは一般化して非常に流行している言葉なのだが、本当に共生ができるのだろうか。主体の問題も出た。これは 5 番目とするのか。それよりも提言をするときの方向性が最初にいるのかなと。ここで書くときに漠然としている…ヨーロッパ特に北欧の小さな町の環境に対する取り組みの事例がたくさんある。ほんとうに小規模の町である。そういう所の方が参考になるのかなと思う。7 ページのドイツの話では『例えば…』というようにし

ておいた方がよい。内容的に環境教育で環境省の環境教育懇談会の話があるのだが、富田先生が参加されていた三重県環境教育懇談会に関することが出てきていない。そのことについても触れておく必要はあると思う。」

次回開催日時 平成 15 年 2 月 21 日（金） 午後 2 時より

開催場所 市役所 5 階 特別会議室

次回テーマ

提言書の内容について